

（特選）

☆紫陽花の褪せゆく藍や医者通ひ

良月

紫陽花は6月の最盛期を過ぎて7月、8月になると色褪せて美しさを失う。作者は体調を崩して、医者通いを余儀なくされている。取り合わせの決まった秀句である。

・梅雨明けや大空高く鳶の声

忠男

梅雨が明けて晴れわたった空に一羽の鳶が鳴きながら飛んでいる。視覚と聴覚で捉えた素直な写生句で情景が鮮やかに目に浮かぶ。

・街中を目覚めさしたり神輿渡御

進

浜降り祭の景、早朝から茅ヶ崎地域の神社三十数社の神輿が太鼓を鳴らしながら浜辺に集まり、海中に入るといいう神事。太鼓の音に目覚め、そうだ見に行こうと人々は浜辺に。

（入選）

・静かさの中に香るや合歡の花

けんじ

・白粥や赤き梅干一つ乗り

玄舟

・子ら走りビキニも走り海開き

繁好

・腹這へば莫座と磯の香海開き

よしまさ

・光る波白帆も走る海開き

尤子

（佳作）

・初めての梅干に子のゆがむ顔

良月

・膝折りて梅干す婆の丸き背

繁好

・横たはる女眩しき浜日傘

進

・なつかしき梅干の味母の味

きよし

・日の差して光る草叢露涼し

繁好

・海開き監視ドローンに鳶追はれ

かつを

・高波を怖がる子らや海開き

良月

・家中に香り漂ふメロン食ぶ

邦夫

・梅雨明けや家中の戸を開け放ち

良月

・夕風に天日梅干香りけり

たか志

・梅雨明けてたなびく雲に富士の嶺

きよし

・声張りて水掛け合ふや海開き

玄舟

・青柿や生傷絶えぬ男の子

良月

・風少し有り梅干の匂ふほど

一江

・一人酒今日のつまみは冷奴

忠男

・どつぷりと浸る訛りや青林檎

繁好

・草畑群れて飛び交ふ夏の蝶

けんじ